

No. 58 pp.1066-1093

28-II-1991

寄せ蛾記

埼玉昆虫談話会

YOSEGAKI : Saitama Kontyū Danwakai

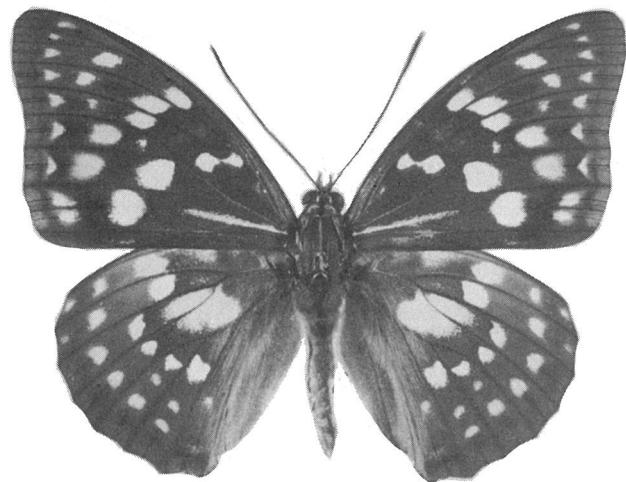


表 紙 の 昆 虫

オオムラサキ *Sasakia charonda charonda* (HEWITSON, [1863]) ♂

1977年6月20日羽化 埼玉県浦和市秋ヶ瀬産(飼育品)

飼育:田島茂 所蔵:シラサギ記念自然史博物館

かつて、浦和市の秋ヶ瀬に産していたオオムラサキ。この数年、同地での目撃例を聞かない。写真の個体は、田島茂氏の飼育、展翅による美しい標本である。

みどりしじみ回顧

朝比奈正二郎

埼玉昆虫談話会で、郷土の蝶としてミドリシジミをとり上げておられ、この蝶を中心にいろいろな催を企画され、又出版物を出されたニュースを楽しくよませていただきました。

私は埼玉県の住人ではないのですが、隣の東京府内で育ったので、ミドリシジミとのふれあいの記憶が少しません。そこで過去60年の間のミドリシジミとの憶い出をひろってみました。

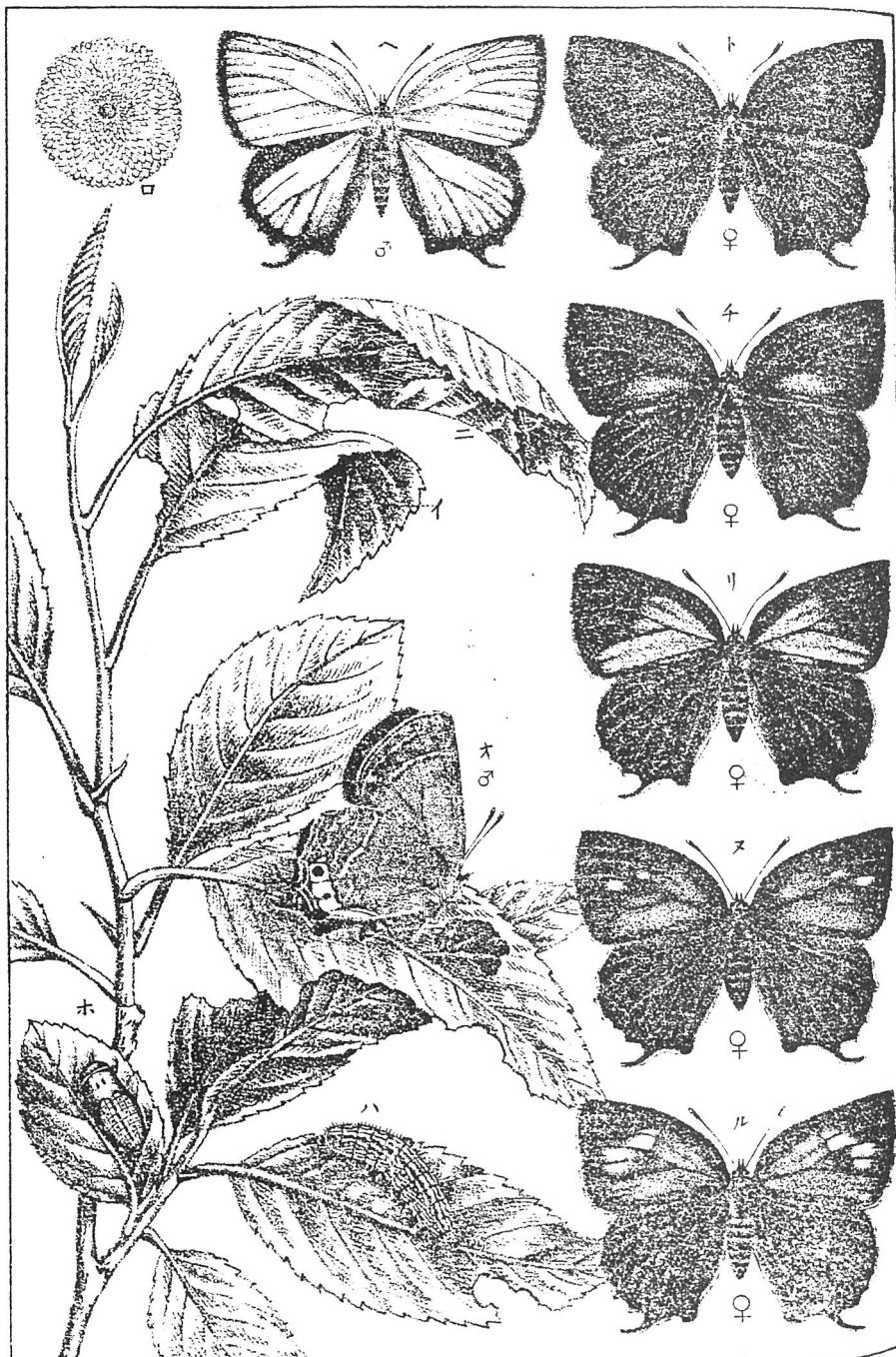
蝶をとりはじめた小学生の頃、家には宮島（幹之助）さんの「日本蝶類図説」があったので、そのカラー図版でミドリシジミの♂♀をおぼえました (pl. 20, fig. 1♂ 2♀)。そこには“期節5・6月(平地)、7・8月(山地)、産地：北海道本州九州、仔虫 やまはんのきの葉を食す(グレーザー氏による)”とありましたが、私の育った高田馬場では見ることも捕らえることもできませんでした。

その頃岐阜の名和昆虫研究所から発行されていた「昆虫世界」のバックナンバーを父親が古本屋で買ってくれ、その第7巻(明治36年)の8月号に名和靖所長の“緑黒青燕尾蝶の発育並びに雌の多形に就て”という論文が載り、卵・幼虫・蛹の記載と共に♀の多型が論ぜられていました。この記事は長いので引用を省略しますが、図版のコピーをお目にかけます。一寸成虫の後翅の尾が長すぎると思いますが、ここで気になるのは卵が葉の裏面に生みつけられていることです。

私の初めてのミドリシジミとの出会いは小学校の上級の頃、中央線の日野駅の北側の丘陵地に父親につれられてゆき、偶然数頭の成虫を探したことでした。そこは今では住宅の真ん中になっていることでしょう。

中学生(旧制府立六中、今の新宿高校)の頃、蝶蒐集の趣味のグループが生まれ、2年先輩の入江明氏(当時帝室林野局長官の入江貫一氏の三男)が先達でした。その御兄弟が高師の付属に在学で、今から考えると林慶君などのグループであったらしく、入江氏からはゼフィルス趣味を吹き込まれました。このグループの先輩に磐瀬太郎氏があったことは、ずっと後になって判かったことです。扱て入江明さんから教わったミドリシジミの産地は、東京府内でいくつかありましたが、一番近い所では、何と現在の中央線阿佐ヶ谷駅のすぐ南側にある「つりぼりのある付近」で、先頃まで小さい溝川があった所です。しかしここでは遂に蝶を見ずに終りました。

昭和のはじめ、西武電車(現在の新宿線)が東村山まで通じ、高田馬場から近い所では石神井

育發の (*Zephyrus taxila*, Brem.) 蝶尾燕青黒縁

昆虫世界, 7(8) 1903.

の三宝寺池があることが判りました。上石神井の駅からウドの畠やくぬぎ林がずっとつづいて、途中小川のいくつかを横切って、三宝寺を抜けると涌泉のある三宝寺池に達します。このコースはトンボの好採集地ですが、昭和4年(1929年)6月29日に訪れた時には、三宝寺池の周りの湿地に生えているひくいハンノキ林で、沢山のミドリシジミを捕まえました。これが今、私のコレクションにあるミドリシジミの主体です。

その頃から東京昆虫学会の採集会が、近郊の所々で催され、西ヶ原の農技研の河田薰さんが、ウラナミアカシジミの蛹からはじまって、ミドリシジミを含む*Zephyrus* 4種の蛹の記載を作られることになりました (*Zephyrus*, 1 (4):145-151, 1929). 河田さんの話では、蛹は葉を巻いた中に入っていることで、アカシジミやミズイロオナガシジミと違うということでした。

次の出会いは、昭和7年2月末の或る日、旧制の成城高校の入学試験の日でした。筆記試験が済んで面接が行はれるという日、早春のまだ寒い日、朝から夕方まで待たされ、退屈の余り、校内を散歩した所、ひくいハンノキの生えているのを見付けました。枝先を一つ一つ見てゆきましたら案の定、ミドリシジミの卵を沢山見付けることができました。成城高校3年間の間には、ミドリシジミだけでなく、オオムラサキも学園の周辺の農家でエノキの生えた所では幼虫も成虫も沢山いました。旧き良き日々でした。

これからあと、北海道や大陸でミドリシジミ(別亜種?)に触れた憶えはありますが、印象の深いのは終戦後間もなくの頃、伊豆の三島に疎開していた家族と一緒に暮らした数年間です。そこは夏だけを過ごす場所で、例の柿田川に近い涌泉地区で、自宅の周りの水田に沿って何本かのハンノキの大木があり、或る初夏1日、思いがけなく、斜陽に乱舞するミドリシジミの群れを見るることができました。最早40年前の話です。

その後、ミドリシジミとの縁は、稍々途切れていきましたが、最近静岡県磐田市の近く、桶ヶ谷沼の自然保護にタッチするようになり、保護区の周辺に定植すべき樹種を撰定することになりました。沼の湿地の部分には多少ハンノキは生えていますが、今後はもっとそれをふやしてミドリシジミを保護しようと話を進めています。話が東京から静岡にとびましたが、愛すべきミドリシジミはどこでも保護したいものです。

(あさひな しょうじろう 〒169 東京都新宿区高田馬場 4-4-24)

.....
謎の直角飛行から

奈良 栄之
.....

§ 1 はじめに

1986年のある夏の日、一頭のクロアゲハ (*Papilio protenor* CRAMER) が突然、異常とも思えるような飛び方をしたのを目撃した。直角に曲がった建物の内側に沿って飛んできたこのチョウは、その角のところで急に直角に曲がったかと思うと、左右に揺れながら空高く舞い上がり、飛び去っていったのである。まさに一瞬の出来事だった。今まで気づかなかったこの飛行は単に偶然に起こったのか、それともクロアゲハの習性によるものなのか。もし後者だとすればどんな要因でこのような飛行が起こるのか。この疑問を解くために、野外観察を行うことにした。なお、クロアゲハがこのように突然、直角をなして飛んでいく現象を、ここでは「直角飛行」と呼ぶことにする。

§ 2 研究の経過

1. クロアゲハ(夏型)が多く見られる場所を調査し、それぞれの場所でその飛び方を観察する。なお、比較のため、ナミアゲハ(*Papilio xuthus* LINNAEUS)の飛びかたもあわせて観察する。その結果をまとめると以下のようになる。
 - 1) 晴れた日により多くの活動が見られ、気温が25°C以下であったり、風の強い日には活動は見られない。
 - 2) 一日の活動時間は午前9時から午後3時半ごろまでで、この間、飛行経路は少しづつ移動する。
 - 3) クロアゲハとナミアゲハの飛びかたの違いを図1、および以下の表にまとめる。

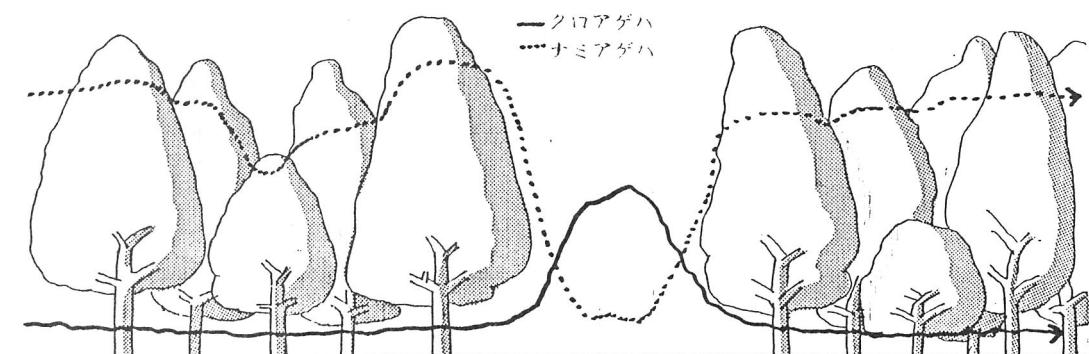


図1 林の付近におけるクロアゲハとナミアゲハの飛び方の違い。

クロアゲハ	ナミアゲハ
◇ 林内を飛ぶときは、こもれ日のさし込んでいる所を飛ぶ。	◇ 林内はほとんど飛ばない。
◇ 林や建物に沿って飛ぶときは、そのヘリから70cmくらいの間隔を保ち、日陰を1.5~2mの高さで飛ぶことが多い。	◇ 大きな木(高さ4~6m)の樹上をゆっくり飛ぶ。
◇ 林と林の間の裸地では高さ3~4mまで舞い上がり、速く飛ぶ。	◇ 林と林の間の裸地では低く、速く飛ぶ。
◇ 四つの地点で直角飛行が見られた。そこはいずれも林か建物の壁のヘリで、直角をなす角である。(図2のA~D地点)。	◇ 直角飛行は見られない。

表1 クロアゲハとナミアゲハの飛びかたの違い。

以上の事から、クロアゲハの飛行経路は多くの個体でほぼ決まっており（この経路は「蝶道」と呼ばれている）、これは林や建物などの地形と、各地点の照度によって決められるように思われる。すなわち、物体のヘリから一定の距離を保って飛ぶ傾向があり、一方、好みの照度の地点を選んで飛ぶ傾向もあるようだ。では、直角飛行ははたしてどのような原因で起こるのだろうか。

この点を追及するために次のような観察を続ける。

2. 直角飛行の見られる四つの地点A~Dで、クロアゲハの飛ぶ経路や速さ、高さ、および付近の照度などをさらに詳しく調べる。その結果をまとめると以下のようになる。

- 1) 直角飛行前の地点、少なくとも5m以内ではほぼ同じ地形が続く。
- 2) 直角飛行前の地点ではほぼ一定の照度が続く。
- 3) 直角飛行前の地点の照度(a)と直角飛行後の地点の照度(b)の差(a)-(b)は+32300Luxから-25000Luxまでさまざまな値をとる(図3)
- 4) 直角飛行後の飛びかたは照度条件により異なる。
 - ①直角飛行後が日陰の場合は、2~3秒後にもとの飛行状態にもどる(図4のロとハ)
 - ②直角飛行後が日なたの場合は、高く舞い上がったまま飛び去る(図4のイとニ)

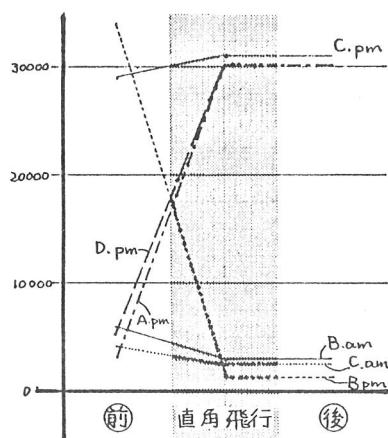


図3 直角飛行の起こった前後の地点における照度。

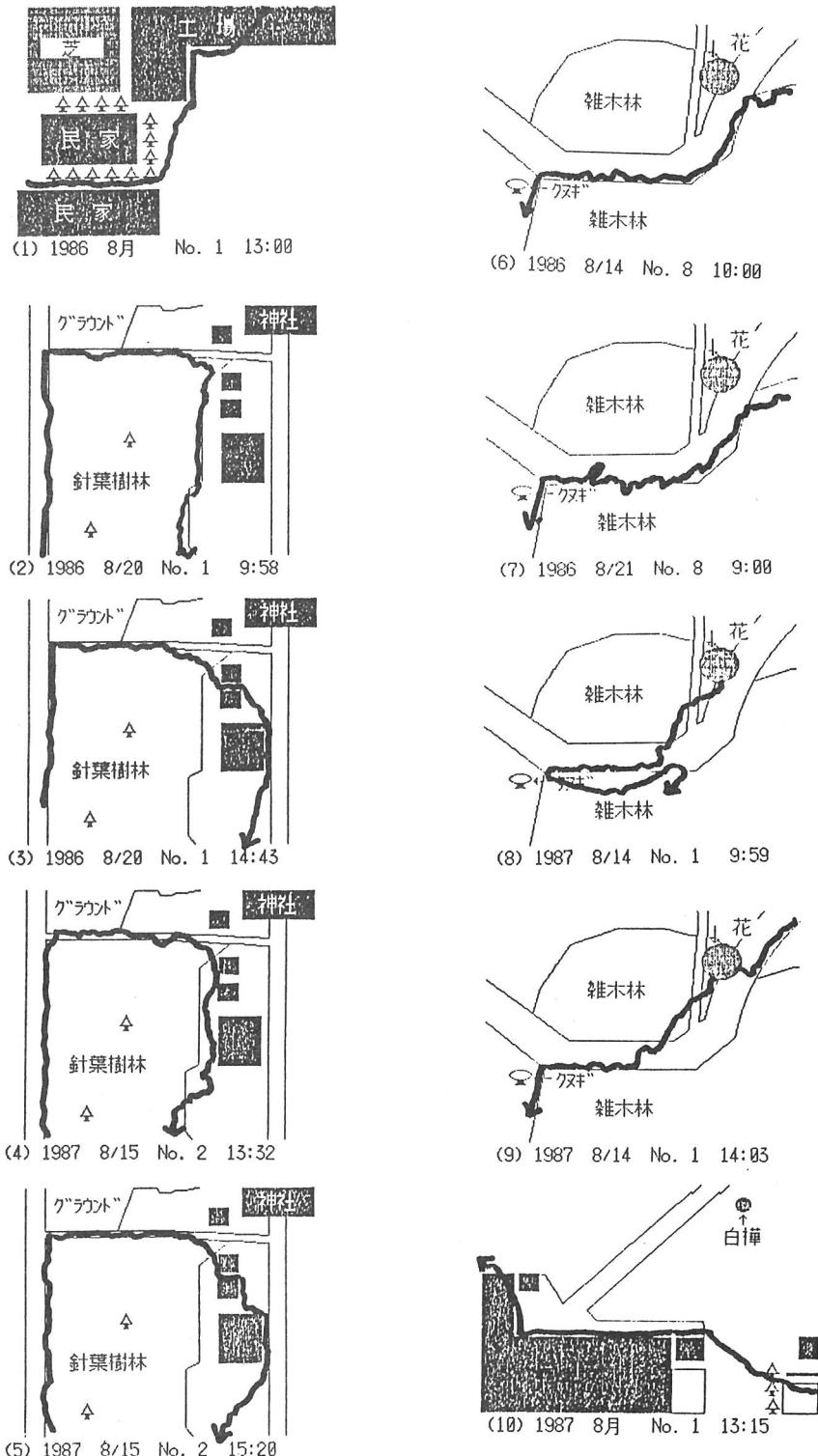


図2 直角飛行の見られた4つの地点におけるクロアゲハの飛行経路(代表例)。
 A地点(1)とD地点(10)…建物の壁面が直角に曲がっている。
 B地点(2)～(5)とC地点(6)～(9)…林縁が外側に向かって直角に曲がっている。

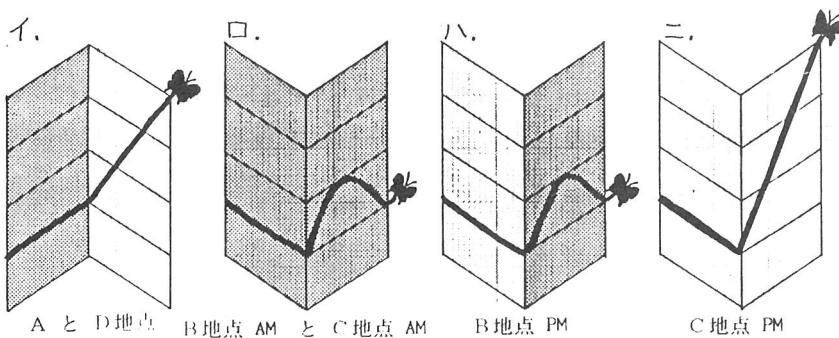


図4 クロアゲハの直角飛行後の飛び方の変化、照度条件によって異なる。

以上のことから、直角飛行そのものはその前後の照度差にはかかわりなく起こり、一方、直角飛行後の飛びかたは照度要因によって決められるものと思われた。そこで、照度要因がクロアゲハの飛びかたに及ぼす影響を確かめる実験を考察してみた。

3. カメラ用ストロボを使って、クロアゲハの光に対する反応について実験する。まず、クロアゲハの頭と胸の間、および胸と腹の間を糸で軽くしばり、ある程度自由に飛べるようにする。次にチョウとストロボとの距離を段階的に変えながらストロボをたき、チョウの反応を観察する。(図5)

この結果、図6に示したように、クロアゲハは少なくとも30cm以内の距離からストロボ光に対して、急に翅をはばたかせる反応をすることがわかった。一方、同様の実験をナミアゲハで行ったが、この種はストロボ光に対してほとんど反応を示さなかった。

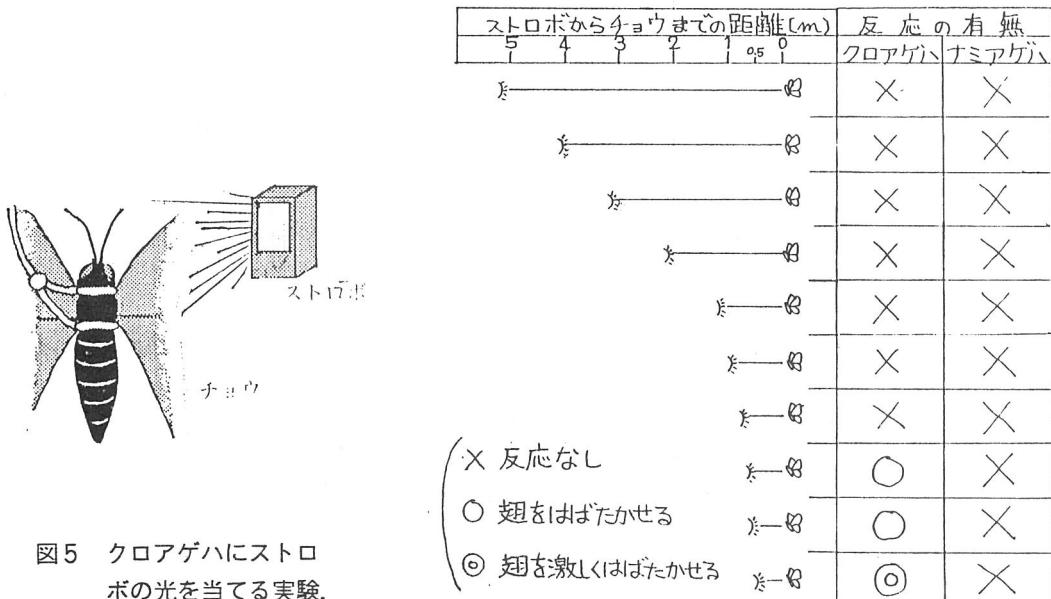


図5 クロアゲハにストロボの光を当てる実験。

図6 ストロボの光に対するクロアゲハをナミアゲハの反応。

§ 3 結論

クロアゲハは、地形と照度の両方の情報をバランスよくとり入れながら飛行しているように思われる。すなわち、比較的暗い照度の地点を好んで飛ぶが、ただでたらめに飛ぶのではなく、林や建物のヘリ等を常に視覚にとり入れながら、それらとほぼ一定の間隔を保って飛ぶことが多い。直角飛行は蝶道が直角に曲がっているような場所で、この2つの要因のバランスが崩れたときに行われるのではないかと思う。

まずクロアゲハは、一定の照度の地点を物体のヘリに沿って飛んでゆき、そのヘリの尽きたところで物体の形を視覚にとり入れて直角飛行する。

もし、この飛行の前後で照度の差が大きいときには飛びかたがおおいに異なる。暗い所から明るい所へ出たときには、低くゆっくりとした飛び方から高く速い飛び方に変わり、逆に明るい所から暗い所に出たときは、低くゆっくりとした飛び方になる。この飛び方の違いは、明るい地点では高くすばやく、暗い地点では高さ1.5~2mの所をゆっくり飛ぶというクロアゲハの飛行の一般的な傾向と一致するものである。

以上のことから、直角飛行においては、直角に曲がるという飛行経路は、物体のヘリの形によって決められ、また、飛ぶ高さや速さは照度によって決められるのではないかと思われた。

参考文献

日高敏隆『チョウはなぜ飛ぶか』岩波書店 1975年

(県立松山高校生物部 O B 〒355 東松山市松山町 1-6)

編集子 註： 奈良栄之氏のこの研究は、当会の団体会員である県立松山高校生物部に氏が在籍していた時の研究で、昭和62年度・埼玉県科学教育振興展覧会において、最高の賞である『知事賞』を得、全国展においても『文部大臣奨励賞』を受賞した研究です。。これを、編集子の依頼で本誌の原稿として1988年6月に投稿してくださったのですが、他誌への掲載の順序や編集上の都合で掲載が伸び延びになってしまい、ここにきてやっと掲載できました。奈良栄之氏、および同高生物部顧問の清水晃先生にお詫び申し上げます。

.....

「タカネヒカゲに会えました」の記

木通田 光

.....

寄せ蛾記53号に、小野寺博昭氏の書かれた「タカネヒカゲに合わざる」の記という悲惨な紀行文が掲載されている。人間が「遭難」という二文字を目の当たりにした時の極限状態を小野寺氏の鋭い観察眼がとらえていて、読む者の臨場感を一層わきたたせてくれる。

確かに遭難は、我々山に奥深く入り込む者にとっては恐怖である。しかし、適切なルートのとりかたや天候の先読み等、人為的に防ごうと思えば出来る事柄がある事も事実である。

私は小野寺氏より多少年齢は若いものの体力的には恵まれた方では無く、登山の経験もそれほど多いとはいえない。ましてこれから始まる山行の寸前に急性の気管支炎のような咳が止まらない症状に陥ってしまった。そんな泣き面に蜂の状態の中、私が体の中で唯一誇れる明析な頭脳は次のような指示を与えた。

—梅池から登れ—

梅池高原の上に位置する梅池自然園は白馬大池まで約2時間半の距離と書かれているし、そこからタカネヒカゲの生息地までは1時間もあれば着くであろう。恐らくこれがタカネヒカゲに会える最短のルートであるに違いない。はたして半病人の軟弱登山で目的を達成する事ができるであろうか。

先程も書いたが、体力に恵まれない私は歩くことが嫌いである、特に沢登りのように岩の連なる登り等最悪で、出来ることなら下で待っていて上から降りてくる蝶を撮影したいと思っている。しかし、同行に根性のある採集者を選んだが最後、このせつない願いは聞き届けられる事も無く無残にも踏みにじられるのが常である。

私が真に目指す理想的撮影は車横付けで出来る撮影である。ところが、高山蝶の中には私の願いを打ち碎くように、何時間も歩かなくてはお目にかかる事の出来ない超恥ずかしがり屋が何種類かいるのだ。

タカネヒカゲを筆頭にタカネキマダラセセリ、クモマベニヒカゲ、ミヤマモンキチョウ・・・この内、ミヤマモンキチョウは浅間山系に車道より5分というポイントを発見し難無くクリアー、続いてクモマベニヒカゲも岳沢で既に写真撮影に成功した後、乗鞍岳にスーパー林道すぐそばのポイントがあると聞き問題ないし、タカネキマダラセセリはかなり苦しんだものの大仙丈沢原頭にて私としては異例の3時間半にわたる登山の上に写真に収める事が出来た。北海道にも同様の高山蝶がいるものの、層雲峡から黒岳七合目までのロープウェイが出来たおかげで黒岳山頂までの約40分の直登さえこなせば後はたいした事はなく、すでに1985-6年にかけて2度の遠征でクリアーしたのだった。

そして、残る高山蝶はタカネヒカゲただ1種となったのである。

何故、タカネヒカゲにこだわるか、それにはもうひとつ別の理由がある。それは私の自己満足的フィ

ールドワークである日本産蝶類生態写真撮影の226種目にあたるからだ。談話会には優秀なカメラマンの方が大勢いらっしゃるので、生態撮影が採集よりはるかに難しい事は説明する必要もないが、整然と並べられた標本の昆虫より、フィールドでの生き生きとした虫たちの姿をそのまま写した写真の方がより素晴らしい感動を与える事実はだれしもが感ずる事であろう。そんな動機から始めた生態写真撮影であるが、数年前に200種を越え、とうとう今年アポイ岳でヒメチャマダラセセリを撮影したことで225種を突破してしまったのだ。始めた頃は一回の撮影行で10種類くらい増やすことは珍しい事ではなかったが、ここへきての1種類はなかなか大変で、特に撮影に体力のいる高山蝶は何としても40前に片付けておかねばもう後が無い。従って行くチャンスのある今の内にどうしてもクリアーしておきたい蝶がタカネヒカゲなのである。

話がだいぶ横道にそれてしまった。そうゆう訳での2人の猛者すらなしえなかつたタカネヒカゲとの対面を、あえて半病人の私が挑戦したのは1990年7月の18日だった。

前日の夜に東京を出発した私は順調に車をとばし、18日の午前3時30分過ぎには白馬村に到着した。

登山口の梅池自然園まで車で入れればなんら問題がないのだが、7月16日からはマイカー規制のため、梅池高原より上えは車で入る事が出来ないのである。従って交通手段はバスかタクシーしかないのだが、貧乏人の常で当然バスを選んだ私は駐車場のない白馬駅をさけてつぎにバスの停車する白馬大池駅に車を置き、そこからバスに乗る事にした。バスの始発駅は白馬駅であるが、満員の時この駅は通過してしまうううなので、シーズン中に行かれる方は白馬駅から乗られた方が良い。白馬大池の駅では2時間程仮眠がとれるのだが、どうも喉の調子が悪く横になると咳がでるので結局一睡もできずにバスの時間になってしまった。午前6時に白馬駅を始発したバスは6時14分、定刻通り白馬大池に到着し約50分程で終点梅池自然園に着く。軽く準備体操をした後自然園を出発、時計の針は午前7時を10分程まわっていた。

しばらくは樹林の中を歩くが、道が急登になるあたりから木の背が低くなり陽射しが容赦なく照りつける。途中でオバタリアンの1連隊を追い越したが、彼女たちは常にどんな所でもしゃべり合いながら登るので、北海道の山に行くときは一緒にさそと良い、きっと熊も恐れをなして逃げ出すだろう。やがて灌木帯を過ぎると台地状の上へ出た、ここは湿原となっており天狗原（てんぐっぱら）と呼ばれている。道はここで風吹大池へ下る道と別れる、自然園を出てから約1時間の行程である。標高は2200mなので300m程登ったことになる。見上げると正面に乗鞍岳の急斜面が白く光る雪渓のかなたにそびえている、これからここを登るのかと思うとゾッとする。「アーもう帰りたい、咳はとまらないしくたびれたヨ。」等とまるでチビまる子ちゃんのように弱音をはきながらも少しづつ登る、30分程で雪渓の下へ到着、この辺りから巨大な岩をピョンピョンと飛び越えながら登る。名づけて恐怖の義経八漕飛び登山である。もし岩の割れ目にでも落ちたら骨折は間違いないまさに恐怖との戦いだ。やがてゴロ岩地帯を抜け雪渓をロープを伝わって越えるともう乗鞍岳の頂上は間近である。ここは標高2436mだから約230m

の直登だ。

そして眼下には白馬大池が見渡せ、大池山荘の赤い屋根が輝いて見えた。

時間は9時を少しまわっていた、山荘まではまたゴロ岩が続いている少し手間取ったが何とか9時半前には到着、小屋から見ると目標の小蓮華山らしき山が見えたので小屋のおにいちゃんに聞いてみた。

「あの結構先に見えるピークが小蓮華ですか」

「イヤー、小蓮華はあのピークのもっと向こうでチョットこっからはみえないネー」思わず目が点になってしまった私であったが、ともすれば失いそうになる気力を奮い起こし小蓮華山への登山道を進む事にした。急坂を登りきると道はハイ松の中に入り視界が閉ざされる、そしてハイ松を抜けた瞬間・・・そこには夢にまで見た岩れき地が広がっていた。白馬大池を出て僅か10分である。

「もしかするとここにいるかも・・・」

ところが思いとはうらはら、岩れき地の上を飛ぶものは何もない。ふと見ると岩れきの中にコマクサの花が見える。なかなか花のつきも良いし、もしウスバキチョウを放したらヒョットして・・・等とんでもない事を考えながらも足を進める。やがて、同じ岩れき地でもちょっと感じの違う乗越状の地形になった途端、オレンジ色の影が・・・

「イタッ！タカネヒカゲだ 」

同じ仲間のダイセツタカネヒカゲと比べやけに赤っぽい感じがする。

辺りを見渡すと数は少ないもののアチコチに飛んでは止まり飛んでは止まる影が見受けられる、しかし、よく注意して見ていないと見事なまでの保護色で全くまわりの岩と見分けがつかないので、撮影は容易ではない。なんとか90mmマクロで1巻、28mmで1巻を撮り終えホッと一息ついた。時計を見ると午前10時、自然園を出発してから3時間足らずであった。

やがて白馬山荘に戻って昼食をした後下山する事にした。咳は相変わらず止まらず苦しい登山であったが、最短ルートであった為撮影に成功したのであろう。思えばタカネヒカゲの群舞の見られた小蓮華山への稜線からは、小野寺氏らが昨年難渢した雪倉岳への稜線がきれいにみわたせた。そこは素人目にもえわかる険しいルートのように見えた。なんであんな険しいルートをとったのだろうか、私には詮索するすべもなかったが頭の中には「八甲田山」という映画がチラつき離れなかった。自然園には午後1時過ぎに到着、両膝はガクガクで休み休みやっとの思いでたどりついた感じである。登山開始からざっと6時間、もう二度とここへ来る事はないだろう。

(ひだ ひかる 〒135 東京都江東区清澄3-5-11)

.....

埼玉県産半翅類雑記（13）

野沢 雅美

.....

○ 秩父産カメムシ科3種の記録

1. ツヤアオカメムシ *Glaucias subpunctatus* WALKER, 1867 (カメムシ亜科)

緑色で油状光沢をもつが、*Nezara*属のアオクサカメムシおよびミナミアオカメムシによく似ている。長谷川(1954)は、触角や前胸背側角をはじめこれら3種の識別点を詳しく報告している。

本種は本州以南から琉球、台湾および中国に分布する東洋区系の種である。関東地方では、神奈川県など南部で多くの記録がみられるものの、北部では稀に属する。これまで、埼玉県では浦和市常盤町(1ex. 13. X. 1966. 磐田洋二採集)の記録が知られているにすぎない。

筆者は、秩父郡小鹿野町において灯火採集により飛来した1個体を得たので報告する。

※ 秩父郡小鹿野町合角 1♂ 16. IX. 1989. (Light trap)

2. イシハラカメムシ *Blachynema ishiarai* LINNAUORI, 1961 (カメムシ亜科)

1961年に東京小仏産の標本をタイプとして記載された種で、体長10~11mm。関東山地や四国などから知られている。成虫越冬し、埼玉県内では皆野町や長瀬町の記録がある(埼玉の半翅類, 1978)。いずれも越冬期の採集品である。

今回、水野和夫氏によって1個体が得られたので記録しておく。水野氏によれば、自宅網戸に越冬のために飛来した多数のテントウムシ類の中に混じっていたという。

なお、ツマジロカメムシ *Menida violacea* MOTSCHULSKY 3個体も同時に採集されている。本種を採集され惠贈下さった水野和夫氏に感謝する次第である。

※ 秩父郡吉田町上吉田 1♂ 12. X. 1989

3. シモフリクチブトカメムシ *Eocanthecona japonicola* (ESAKI et ISHIHARA, 1950) (クチブトカメムシ亜科)

埼玉県には、本種を含む7種のクチブトカメムシ類が知られている。本種は日本固有の種で、個体数は少ない。

埼玉県を含む関東地方に於けるクチブトカメムシ類の記録は、林(1982, 1983)に詳しく述べられている。

県内における既産地は、飯能市、大滝村二瀬、皆野町蓑山などである。筆者は、今回両神村で採集したので記録しておく。

※ 秩父郡両神村四阿屋山(あずまやさん) 1♀ 22. X. 1989.

<参考文献>

石原 保(1962) イシハラカメムシの分布, *Rostria* 3:9

林 正美(1982) 埼玉県で採集されたオオクチブトカメムシ, *Rostria* 34:411-413.

——— (1983) 関東地方におけるクチブトカメムシ類の採集記録, *Rostria* 35:441-444.

野沢雅美(1978) 埼玉の半翅類, 埼玉県動物誌: 357-360.

宮本正一(1970) 原色昆虫大図鑑III. 北隆館: 78-80.

(番号369-12 のざわ まさみ 寄居町桜沢 2506の4番地)

埼玉県産蝶類記録 (1)

中川 重用券

筆者は、1971年から1980年まで埼玉県内の蝶類採集記録を整理したので報告する。以下報告する記録は、筆者自身の明確な記載のある記録（目撃記録を含む）、および現存する標本データのみを採用し、ここに発表するものであり、過去において採集されたものでも、記載洩れ等不確実なものは一切省いた。また、筆者の行き届かない採集行故、空白の年度があることをお許し願いたい。

末筆ながら、発表をすすめて下さった市川和夫、巣瀬司両氏に心よりお礼申し上げる。

◎ セセリチョウ科

ミヤマセセリ	4. IV, 1973	浦和市大谷口	1♂
	11. IV, 1973	浦和市大谷口	1♂1♀
ギンイチモンジセセリ	26. IV, 1973	浦和市秋ヶ瀬	12exs.
	29. IV, 1975	浦和市秋ヶ瀬	4♂♂ 2♀♀
ミヤマチャバネセセリ	26. IV, 1973	浦和市秋ヶ瀬	4exs.

◎ アゲハチョウ科

キアゲハ	24. VI, 1973	皆野町蓑山	1♀
	20. VI, 1973	皆野町蓑山	8exs.
モンキアゲハ	20. VI, 1973	皆野町蓑山	2exs. 目撃
ジャコウアゲハ	2. IX, 1974	浦和市大谷口	5幼(2♂♂ 1♀)
	9. IX, 1974	浦和市大谷口	10幼(5♂♂ 5♀♀)

◎シロチョウ科

モンシロチョウ	18. IV, 1971	浦和市大谷口	5♂♂ 2♀♀
	25. IV, 1971	浦和市大谷口	1♂
	28. III, 1972	浦和市大谷口	1♂
	28. III, 1973	浦和市大谷口	3♂♂ 1♀
	4. IV, 1973	浦和市大谷口	8♂♂ 2♀♀
	8. IV, 1973	浦和市大谷口	1♀
スジグロシロチョウ	25. IV, 1971	浦和市大谷口	2♂♂
	4. IV, 1973	浦和市大谷口	1♂
ツマキチョウ	18. IV, 1971	浦和市大谷口	5♂♂ 2♀♀
	25. IV, 1971	浦和市大谷口	2♂♂
	28. III, 1972	浦和市大谷口	2♂♂
	6. IV, 1972	浦和市大谷口	1♂ 1♀
	4. IV, 1973	浦和市大谷口	5♂♂ 1♀

	8. IV, 1973	浦和市大谷口	3♂♂
	8. IV, 1973	浦和市南浦和	1♂
	8. IV, 1973	浦和市井沼方	1♂
	11. IV, 1973	川口市小谷場	1♂
	26. IV, 1973	浦和市秋ヶ瀬	1♀
キチョウ	28. III, 1971	浦和市大谷口	1♂
モンキチョウ	28. III, 1971	浦和市大谷口	1♀
	24. VI, 1973	皆野町蓑山	1♀

◎シジミチョウ科

ウラゴマダラシジミ	24. VI, 1973	皆野町蓑山	1♀
	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♂ 1♀
アカシジミ	20. VI, 1976	皆野町蓑山	4exs.
ウラナミアカシジミ	20. VI, 1976	皆野町蓑山	4exs.
ミズイロオナガシジミ	18. VI, 1972	浦和市井沼方	1♂ 1♀
	24. VI, 1973	皆野町蓑山	1ex.
	20. VI, 1976	皆野町蓑山	7exs. (斑紋変異2個体を含む)
オオミドリシジミ	24. VI, 1973	皆野町蓑山	8♂♂ 1♀
	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♀
ツバメシジミ	28. III, 1972	浦和市大谷口	1♂
	26. IV, 1973	浦和市秋ヶ瀬	8exs.
ルリシジミ	4. IV, 1973	浦和市大谷口	2♂♂ 3♀ ♀
	8. IV, 1973	浦和市大谷口	1♀
アサシジミ	24. VI, 1973	皆野町蓑山	5♂♂ 6♀ ♀
	20. VI, 1976	皆野町蓑山	4♂♂

◎タテハチョウ科

ミドリヒョウモン	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♂
クモガタヒョウモン	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♂
ウラギンヒョウモン	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♂
イチモンジチョウ	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1ex.
ホシミスジ	24. VI, 1973	皆野町蓑山	3exs.
	20. VI, 1976	皆野町蓑山	5exs.
ヒオドシチョウ	20. VI, 1976	皆野町蓑山	1♂ 1♀
ゴマダラチョウ	11. XI, 1973	浦和市秋ヶ瀬	幼虫多数
オオムラサキ	11. XI, 1973	浦和市秋ヶ瀬	幼虫多数

◎ ジャノメチョウ科

クロヒカゲ	20. VI, 1976	皆野町蓑山	2♂♂
-------	--------------	-------	-----

(なかがわ としかつ 〒335 蕨市北町 1-13-10-201)

1991年2月

寄せ蛾記58号

浦和市南浦和でコシロシタバを採集

中川利勝

筆者は、浦和市南浦和においてコシロシタバを採集したので報告する。データは以下の通りで、標本は筆者が保管。

8.VIII.1990 浦和市南浦和 1ex.

採集地は舟山公園内の小さなクヌギ林で、昼間に採集された個体である。また、鳥類に襲撃されたと思われる破損部分、所謂リーグパッチを除けば羽化して間もない新鮮な個体で周囲のクヌギで発生したものと推察される。

本種は山地ではほとんど見られない平地産のCatocalaの代表的なものの一つで、クヌギを食樹としているが、近年、全国的にも平野部のクヌギ林が開発により減少しており、浦和市内でも、かつてのクヌギ林がつぎつぎと伐採の憂き目にあい、生息地が奪われつつある種である。浦和市内でも、ハンノキ、クヌギ等の豊富に残された秋ヶ瀬一帯では、まだ比較的に多いようで、時として昼間でも見られることがあるが、南浦和周辺では、過去においては割りと目に見える機会が多かったものの、住宅の立ち並ぶ現在では珍しい記録かと思われる。

末筆ながら、報告をすすめて下さった市川和夫氏に心よりお礼申し上げる。

(なかがわ としかつ 県335 蕨市北町 1-13-10-201)

大宮市大和田町のコシロシタバ

斎藤洋一

1990年8月19日、大宮市大和田町2丁目にてコシロシタバ5exs.を採集したので報告する。当地は大和田駅より10分程の、宅地に雜木林の点在する環境で、採集出来たのはコナラを中心とした広さ約300坪の林。下草もかなり生えやや薄暗いほとんど手入れのされていない林だった。翌年にはビルの建築計画があり、この林は消滅する運命にある。

報告に当たり、本種について御教示頂いた市川和夫氏に感謝申し上げる。

(さいとう よういち 県132 東京都江戸川区平井 5-26-12)

.....
南房総から(3)

小野寺 博昭

埼玉昆虫談話会の皆さんには、この夏をいかにお過ごしになりましたか？ 埼玉から遠く離れて房総半島に住んでおりましても、蝶友諸氏からの書簡を繋ぎ合わせると皆さんの活動状況、動きがよく分かりますが、竹内崇夫さんからお便りを頂戴して、久々に「南房総から」になりました。

<竹内崇夫氏→→→小野寺 (1990.7.15)>

『拝啓 正に、かきいれ地獄真っ直中の貴兄に、陣中お見舞い申し上げます。加えて、暑中お見舞い申し上げます。また、随分長い間ご無沙汰しておりましたことをお詫び申し上げます。……まだいろいろなご挨拶をしなければいけないような気がしますが…。』

この度は、「蝶日記 1989」をお贈り戴きました大変ありがとうございました。おととい朝の通勤時で読み終わりました。まったく運の良い男がいまして、丁度その日の昼、京都の中村君（談話会会員、東レ）が本社へ日帰り上京したついでに、高山のクロツバメシジミを生きたまま手渡してくれましたので、帰りの道中を楽しませて上げようと（「蝶日記 1989」を）貸してやりました。研究畠の彼も非常に記録まめでして、「蝶日記 1990 in 京都」が来年出来てくることを微かに期待しています。

ついせんだって、樋田さんの情報を流したら、完全に樋田型黒燕病に感染した人物ですから…。

さて、今回の版も素晴らしい出来だと思います。いつもながら記録が克明で、そのままレポートになる部分があったり、蝶たちが主人公で、それを取り巻く諸々な人々とのホームドラマであったり、そこには時々小生も登場してテレくさかったり、筆者の最も得意とする（と小生は思う）紀行文の中で、筆者のイキイキした様子が描かれ、とにかく、内容の濃い作品です。小生が登場して来るだけに、又、登場人物の大半を知っているだけに、格別感慨深く読みました。次回版も今から楽しみにしています。

ところで小生の近況ですが、ゼフの飼育を終え、ボツボツ展翅しています。群馬県東村のウラクロ（24卵→12親）、赤城山・小鹿野のウラキン（赤城からは赤斑型2親）、北海道のミドリシジミ7親、同オオミドリ13親、那須のオナガシジミ9親です。エゾミドリ、ヒロオビミドリが今後のテーマです。

ミドリシジミ委員会の方ですが、4月29日に2回目のシンポジウム、6月24日には2回目の観察会を盛大に行い、これから各地で開かれる展示会に標本の貸し出しが始まります。小生は秩父のデパートに12,3箱貸します。先日、牧林氏、江村氏と県環境部を訪れ、来年の“県制120周年事業”における「県の蝶指定」のドラフトを協議しましたが、いよいよ本番の緊張感が沸き上がって来ました。

ところで昨日、例の下田ポイントのクロシジミを観察に行きましたら、なんと大島（良美）氏が来ており、クロシジミの生活史をカメラに収めていました。例のポイントが実に良い環境に変わっていました。以前の林部が一部切り開かれ、ヒコバエが良い具合に育って、アブラムシがビッシリ付き始めました。根際のオオクロアリの巣も大きく、クロシジミ生息の舞台がすっかり整って、8月の産卵を待っています。

大島氏の話では、アブラムシの付いている枝に、真っ白になるほど産卵するようです。親は結構飛んでいましたが、大島氏から「親を取るのは止めましょうよ。」と何度も咎められましたので、今年度の記録として3頭にとどめました。その後、三カ島のホソオチョウ観察に同行しました。異国の蝶が湿った畑土の上スレスレをヒラヒラ舞う様や草むらに翅をひろげてプランとぶら下がった姿は実に感激的でした。

色々取り止めのない話になりましたが、いずれ何処かでお会いしたいと思います。もしかすると清澄かも知れませんし、銚子のサメの歯採りの帰りかも知れません。樋田さんとは東京駅の地下の饅頭屋で、たまに一杯やりますが、秋にでも一緒にやりませんか。

お忙しい中、健康には十分気をつけて、秋以後の「蝶日記 1990」の中での活躍に備えて下さい。まずは御礼まで。

敬具

[追伸] 一昨日氷室氏宅（伊奈町）の窓際で、オオイチモンジシマゲンゴロウが採れました。

日本での記録は数例しか無かったのを北本市石戸宿での大発見で話題になっていた大型のゲンゴロウです。氷室氏宅は史跡伊奈屋敷の中にあり、周囲をひっくりめ自然が残されていますが、今後話題になると思います。

』

<小野寺→→竹内崇夫氏（1990.8.16）>

『拝復…と言うには余りにも日が経ち過ぎて、竹内さんからお手紙を戴いて既に1ヶ月になります。フィールドに出られない蝶屋は書こうにも書くネタの仕込みが出来ず書けないワケで、夏は東奔西走していた1昨年までとは雲泥の差です。

埼玉昆虫談話会事務局長とも言うべき碓井徹さんから「“寄せ蛾記”を一気に2号分リリースした余勢を駆って8月1日から3日までは埼玉県雲取山、8月4日から5日は群馬県榛名山、9~20日は島根県隱岐島……」とまず羨ましがらせておいて（？）

「（そちらは）お仕事柄シーズン真っ盛りのリゾート地では蝶とたわむれる余裕はないかとは存じますが、“南房総から（3）”などというタイトルでワープロでも叩いて戴ければ、ストレス解消になろうかと思います。…」ですと！

せめて蝶の話だけでもしようかと思い、仕事の合間を縫って11日に小堀さんに電話しましたら事務所の人が「今日から15日までお休みを戴いて東北方面に出掛けております。」とのツレない返事。蝶屋さんは皆それぞれの夏で忙しいのだなあと羨ましい限りです。

ミドリシジミ委員会、中々頑張っているようですね。牧林さんが一度訪ねて下さった時にお話を伺ったり、「ネオゼフィルス」で委員会の活動を読ませて戴いたりしております。特に気に入っているのは、賢明にも埼玉昆虫談話会は「採集禁止を伴わないミドリシジミの保護運動」を展開している点です。

先日、私共の会員制リゾートホテルの野外テラスでバーベキューを楽しんでいたお客様のお子さんが「お母さん！ゴキブリがいるよ！」と言うのです。ホテルの係がすっ飛んで行くと、カブトムシの♀がごそごそ歩いていたそうで（営業妨害だぁ！）、係が「ボク、これはゴキブリなんかじゃなく、カブトムシだよ。」と言うと、その（営業妨害のクソガキ、失礼お子様の）母親が「カブトムシなら角があるんじゃありません？」と宣った由。正に“この親にして、この子あり”的典型的なものですね。

又、ホテル周辺には灯火を慕ってカブトムシやクワガタ、カミキリ等々が飛来しますが、カブトムシやクワガタを欲しがる男の子でも、自分では掴めずに、虫籠の蓋を開けるだけなのです。（虫屋から見れば）このように情けない子供達を我が国に蔓延させないためにも、「生き物を大切に」などと、さかしらぶって、子供から昆虫採集の喜びを奪い取っておいて、昆虫を自らの手で掴み取れないような片輪な子供を大量に世に送り出さないためにも、「採集禁止」だけは止めておきましょう。先日、牧林さんも「知らない人は鳥の卵を取る行為も蝶の卵を採る行為も一緒だと思ってしまうんですよね。」と言われておりました。一般人には違いをきちんと啓蒙する必要がありそうですね。

クロシジミについては、竹内さんの今年の記録は3頭とどめた由。丁度同時期に大島良美さんからお便りがあり、「竹内さんと出会い、『あまり採らないようにしましょう。』と口走ってしまい、申し訳ないことをしたと反省しております。」と書かれておりましたが、私が埼玉へ戻る時まで残しておいて下さい。

さて、私の方は7月31日と今月6日及び12日に清澄山ヘルミスシジミの様子を見に行ってきました。7月31日は妻、息子、娘と親子4人で出掛けましたが、娘の奈緒子（小3）は専らオニヤンマを探るのに忙しく、私もルーミスの方はあまり期待していなかったので、娘のオニヤンマ採りに付き合っていました。オニヤンマの頭はゼフィルスに負けず劣らず金緑

色に輝き、しみじみと見ると中々美しいものですネ。

やがて一番最後尾を歩いていた妻がネットを持って追い付いて来て、「採れたわよ。」と言うのです。ネットを覗くとルーミスシジミの新鮮な個体が入っていました。今年初めて見るルーミスシジミでした。暫くすると、今度は息子の貴弦(たかふさ；小6)が「お父さん！採れた！」と駆け戻ってきました。昨年の最盛期の良好なポイントは、沢沿いの湿った急斜面で、ヤマビルがウヨウヨしており、且つ谷底へ滑落しそうで、とても子供が採集出来るような場所ではなく、息子は昨年はとうとうルーミスシジミを1頭も採集出来ませんでしたが、今年は長竿不要の山道で採れました。

息子にとって今回のルーミスシジミは初採集でしたので、とても嬉しそうでした。ハッと我に返ると、今年ルーミスシジミを採集していないのは、オニヤンマに夢中の娘を除くと、自分だけ…。家長の権威を保つためにも気合いを入れてルーミスシジミを探したのは言うまでもありません。当日の結果は、妻が4頭でトップ。次いで私が3頭、息子が記念すべき初採集の1頭の合計8頭でした。他にシイタケのほだ木に集まって来たヤマトタマムシ（これも金緑色にさん然と輝く美しい生き物ですネ）を3頭採集し、家族全員意氣揚々と引き上げました。

次いで8月6日には（ホテルは既に超満員で、本来ならとても抜け出せる状況ではなかったのですが、頼りになる副支配人に権限を委譲して？）休みを取り、妻に清澄山の入口まで送ってもらい、心ゆくまで単独でルーミス採集を堪能しようと出掛けたのですが、炎天下の清澄山は妙に静まりかえっている感じで、肝心のルーミスシジミは姿を見せず、5時間で僅かに2♂♂1♀を採集したにとどりました。

そして8月12日には、風邪気味の息子を留守番に残し、又もや妻と娘と一緒に清澄山ヘルミスシジミを求めて繰り出しました。台風11号が通過した後ですし天気も良く、バッチャリ採れるのではないかと期待に胸を弾ませて乗り込んだにも拘らず、私と妻が各1頭ずつ計2頭のルーミスシジミを採集しただけでした。例によって娘はオニヤンマとミンミンゼミの採集に熱を上げており、蝶の方はムラサキシジミの完品1♂を採集したのみでしたが、娘だけは至極満足したようでした。

昨年は8月23日の10.00～11.00の僅か1時間の間に8頭、8月29日には10.00～11.35の1時間半余で13頭、9月8日には9.40～10.55の1時間15分で5頭、9月11日には11.00～11.40までの40分間にやはり5頭のルーミスシジミを採集しておりますので、これまでのところは、今年は随分効率の悪いルーミス採集です。

単に時期的に最盛期ではないために目撃するルーミスシジミの個体数が少ないので、それともこの時期は別の場所にいるのか、はたまた今年は不作なのか、どうなのでしょう？

ところで、1昨日の23時頃、ホテルから帰宅する時に、竹内さんの大好きな（私の苦手とする）オサムシを見付けましたので同封します。（採集日：1990年8月14日、採集場所：勝浦市中島590-9 東急ハーヴェストクラブのローディング・スペース）

以前、牧林さんからお話をありましたし、埼玉昆虫談話会の皆さんともお会いしておりますので、冬の宿泊談話会は、私のいる間にこのホテルでやってもいいなと、初代支配人としてはチラッと考えてもおります。それでは又。

敬具」

[注] その後、清澄山へ8月20日と27日に出掛け、各々ルーミスシジミを15exs., 33exs. 採集し、今年の我が家のルーミスシジミは合計61頭となりました。個体数はやはり8月下旬になってからの方が多く、今年も日本一の多産地の名に恥じぬだけの発生があったようです。

…ということで、（あまり「ストレス解消」にはなりませんでしたが）3回目の「南房総から」を終わらせるにします。

以上

(おのでら ひろあき 〒299-52 千葉県勝浦市串浜 1231-1)

入間郡日高町にてハネビロトンボを探集

碓井 徹

筆者は、埼玉県入間郡日高町で、以下のとおりハネビロトンボを採集したので報告する。

採集地：埼玉県入間郡日高町中沢

採集個體：1♂

採集日：1990年8月23日

採集者：碓井徹 (標本保管も碓井徹)

日高町の中沢にある沼地でトンボ類の調査をおこなっていたところ、ショウジョウトンボに追いかけて回されている本種を発見、1時間近く粘った末、岸辺に近づいたところをうまくネットインできた。採集当日は、前日の22日に広島県に上陸した台風14号がこの日には日本海を北東に向かって進んでおり、この台風に向かって吹き込む南からの強い風が22日から県下一帯に吹き荒れており、猛暑の一日であった。なお、当日同地では本種は採集した1頭しか発見できなかった。

(うすい とおる 362 上尾市壱丁目454-3)

.....

清澄山における1990年夏の蝶の記録

小野寺 博昭

.....

1990年夏は、7月31日から連続7週間にわたって、週1回清澄山（千葉県安房郡天津小湊町）に通った。以下はその時の蝶の採集・目撃記録である。

日付	時刻	トシシミ	その他の採集種	その他の目撃種
7月31日(火)	11.15～12.50	8exs.	コジヤノメ ムラサキシジミ	
8月6日(月)	11.00～15.45	3exs.	モンキアゲハ ムラサキシジミ	オスアゲハ、モンキアゲハ、カラスアゲハ、 ジャコウアゲハ、モンクロチョウ、トシシミ、 ムラサキシミ、ヒメウナミジャノメ、 ゴミヅメ、ミドリヒョウモン
8月12日(日)	10.15～13.40	2exs.		ムラサキシミ
8月20日(月)	10.10～14.40	15exs.	キマダラセセリ	
8月27日(月)	10.20～13.50	33exs.	クロコノマチョウ (夏型成虫1♂) ヤマキマダラヒカゲ	アゲハ、オナガアゲハ、オスアゲハ、 スグロシロチョウ、ヒメジャノメ、ヒメウナ ミジャノメ、ムラサキシミ、ヤマトシミ
9月3日(月)	10.30～12.10	2exs.	クロコノマチョウ (終齢幼虫3頭)	ヤマキマダラヒカゲ
9月10日(月)	11.20～14.00	11exs.	クロコノマチョウ (終齢幼虫2頭及び 蛹2頭) ウラギンシジミ秋型	オスアゲハ、モンキアゲハ、トシシミ、 ヤマトシミ、ムラサキシミ、イモリセセリ、 キマダラセセリ、ヒメウナミジャノメ ゴミヅメ

以

(おのでら ひろあき 番363 桶川市泉 2-19-50~4-119)

皆野町でクワトゲエダシャクを探集

柳田 恒一郎

筆者は下記の通りクワトゲエダシャク *Apochima excavata* (DYAR) を採集しているので記録しておく。

1♂ 埼玉県皆野町戦場, 5. IV. 1986 (灯火採集)

本種は同属の普通種オカモトゲエダシャクに似るが、前翅の内横線が中室下で鋭く角ばることで区別できる¹⁾。本種の本県における初記録の報文²⁾を目にするまでは未記録種とは気付かず、今になって報告する次第である。なお、標本は筆者が保管している。

- 1) 井上寛他 (1982) 日本産蛾類大図鑑 vol.1 : 554
 2) 内田正吉 (1990) 寄せ蛾記 (56) : 1034

(やなぎだ こういちろう 〒351-01 和光市西大和団地 1-4-301)

北本市石戸宿でカトリヤンマを採集

碓井徹

北本市石戸宿でカトリヤンマを採集したので報告する。本種は、当会が1984年から1986年にかけておこなった同地での昆虫類調査では、不確実ながら目撃例はあったものの採集されるにいたらず、当時の調査の報告書である『寄せ蛾記48号 北本市石戸宿の昆虫類(特集号)』では、リストアップされていない。今回、北里メディカルセンター北西部の雑木林の林縁にて、地表から3mほどの高さの木の枝で静止している交尾中の雌雄を発見し採集することができた。

採集場所：北本市石戸宿

採集個體：1♀ 1♂（交尾中）。

採集日：1989年9月23日 午後1時ころ。

採集者：碓井徹（標本保管も碓井徹）

(うすい とおる 362 上尾市壱丁目454-3)

.....

北本市石戸宿における注目すべきトンボ類

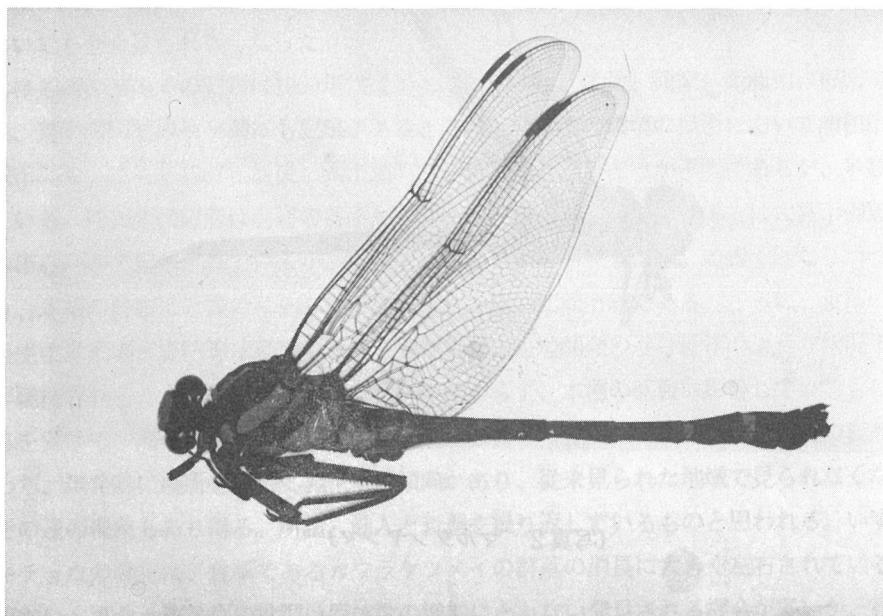
磯野 治司

.....

筆者は、北本市石戸宿において、同地ではこれまでに記録のないトンボ類、および記録の少ないトンボ類を若干採集あるいは目撃しているので報告する。以下の記録はすべて筆者の採集あるいは目撃によるものである。

1. コオニヤンマ *Sieboldius albardae* SELYS

1♂採集、1990年6月17日。採集した日は晴天で、この日の午前中に石戸宿の遊歩道沿いで採集した(写真1の個体)。



(写真1 コオニヤンマ)

2. ネアカヨシヤンマ *Aeschnophleia anisoptera* SELYS

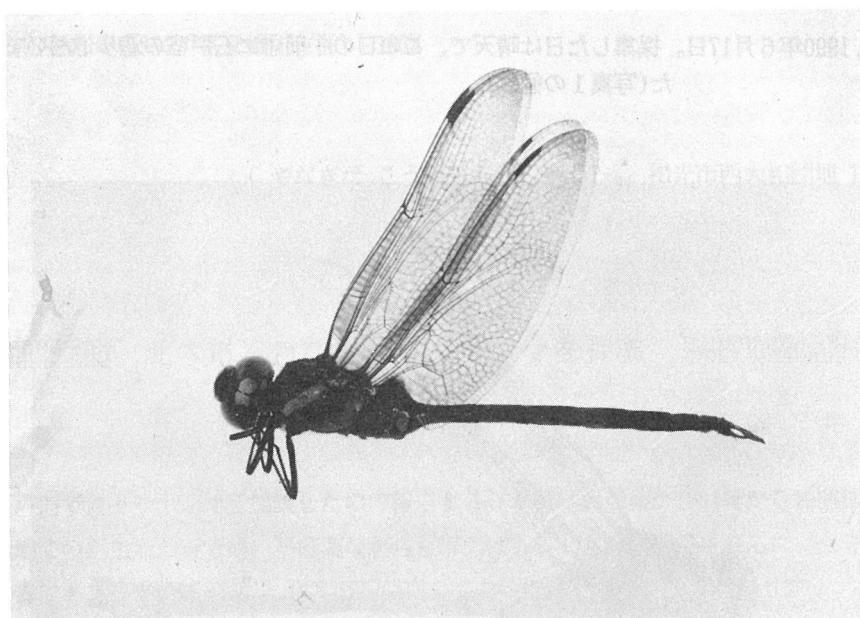
1♀採集(未熟個体), 1990年6月26日。この日は曇りのち雨で、朝5時頃採集したが、採集時に頭部が欠損してしまった。

1♀採集(成熟個体), 1990年9月2日。夕方6時頃の採集。石戸宿の沼の上空2mあたりを飛翔中の個体を採集。

1♀採集(成熟個体), 1990年9月4日。9月2日の採集と、ほとんど同じ状況での採集。

3. マルタンヤンマ *Anaciaeschna martini* SELYS

1♂採集, 1990年9月1日。夕方5時半頃の採集。採集場所は、前種と同じ沼地(写真2の個体)。



(写真2 マルタンヤンマ)

4. ヤブヤンマ *Polycanthagyna melanictera* (SELYS)

1♀目撃, 1990年7月22日。遊歩道下の湿地で、飛翔から単独接泥静止産卵にはいった個体を目撃。残念ながら採集には失敗した。

(いその はるじ 番号363 桶川市上日出谷 683-9 アリーナハイツ A-202)

.....

浦和市大谷口のツマグロキチョウ

中川 重勝

.....

1990年9月21日、浦和市大谷口においてツマグロキチョウ♂を採集したので報告する。採集地はカワラケツメイの群生する荒地で、当地での発生個体か、秋型特有の発生地を離れて飛来した個体かは不明である。周囲には、ミヤマチャバネセセリ、ツバメシジミ等が見られたが、本種は1頭採集したのみである。浦和市内においては筆者自身、本種の採集は20数年ぶりのことであり、特筆すべき記録かと思う。データは以下の通り。

21. IX. 1990 浦和市内大谷口 1♂

浦和市のツマグロキチョウは、かつて1960年代後半までは、市内において10月に第3化と思われる秋型の記録が比較的多かったが、宅地開発の波に押されている昨今では、周辺の川口市、蕨市はもとより浦和市においても全く見られなくなった。

過去における浦和市内での記録は1960年代後半までに集中し、本太、領家、南浦和、根岸等各所に記録が見られ、荒川河川敷の秋ヶ瀬にも記録があるという。発生地の環境の良否において浦和市に及ぶべくもない蕨市においても、1967年前後、同市錦町で一時的なものかどうか不明であるが、多数の個体が確認されている。1970年代以降は前述の各所から次々に姿を消し、浦和市近郊では大宮市御藏、上尾市中妻、北本市石戸等で記録されているが、現在では極めて少ない「まぼろしの蝶」となりつつある。

もとより、本種の分布は近縁のキチョウとは異なり、極めて局所的である。さらに、食草のカワラケツメイの自生する荒地・堤防等は環境の変更を受け易く、宅地開発の進む近年のような状況下では生息環境が永年維持されることがむずかしく、これが少なからず、本種の盛衰に影響しているものと思われる。これらを受けて、浦和市周辺のような住宅地域では、その発生の特徴として発生地の変動も見られる。すなわち、単発的に場所を変えて発生する傾向があり、従来見られた地域で見られなくなったり、あるいはその逆の現象もあり得る。所謂、進入と衰退を繰り返しているものと思われる。いずれにせよツマグロキチョウの発生は、食草であるカワラケツメイの群落の消長に大きく左右されているものと言わざるを得ない。また、第3化の秋型は個体数の増加にともない発見される機会が多いが、第1化の夏型においては個体数が極めて少ないため、筆者においては浦和市内での採集例はない。越冬後、春先に出現する個体も越冬前の個体数に比べると極めて少ないが、これは越冬できず死滅する個体が多いことが原因と思われる。

補足ながら、筆者は近年ツマグロキチョウの調査地として、川口市小谷場、浦和市南浦和・大谷口・井沼方(所謂見沼代用水沿い)・秋ヶ瀬、比企郡吉見、北本市石戸等を回っているが、わずかに1988年北

本市石戸において5頭を確認できたのみである（この地における1989年の2度の調査では、1頭の確認もできなかった）。

絶滅あるいは減少しつつある浦和市産蝶類の中で、筆者が最も愛着を感じる本種が大宮台地から姿を消そうとしている現在、浦和市内の何処かの地で大谷口の採集例のように、ほそぼそとでも生き続けてくれることを願ってやまない。

《参考文献》

保育社 原色日本蝶類生態図鑑（I）

埼玉昆虫談話会編 埼玉蝶の世界

碓井徹（1971）浦和市の蝶類、浦和高校生物部 FAMILY Vol. 22

松本和馬（1972）1970, 71年市辺産蝶類、浦和高校生物部 FAMILY Vol. 23

（なかがわ としかつ 番335 蕨市北町 1-13-10-201）

川口市小谷場のムラサキシジミ訪花例

中川 利勝

1990年9月21日、川口市小谷場地区において、ムラサキシジミ1♂（汚損）の訪花個体を観察。この日の天候は晴天で、正午頃、ニラの花に吸蜜中の本種を発見した。

周知のように、ムラサキシジミは近年県内での分布域を拡大しつつあり、浦和市周辺でも比較的観察されるようになったが、川口市における記録の発表は少ない。また、本種の訪花例は極めて珍しく、筆者自身初めてのことである。

なお、標本は筆者が保管している。

（なかがわ としかつ 番335 蕨市北町 1-13-10-201）

―― 本の紹介 ――

『水よ語れ -日本百名水・姫川源流-』田中欣一編

姫川源流をもって水を語らしめ、そこから湧出する言葉をもって一書を編み、水の文化を考えることは、多年にわたっての念願がありました。… という書き出しで始まる本書は、自然豊かな白馬村姫川源流域を、人文／科学の両面から多角的に眺めた魅力的な本である。本会会員としては、原聖樹氏が[ギフチョウ・ヒメギフチョウの混生地]というテーマで13ページを書いていている。この他に昆虫関係では、[姫川源流に棲む虫たち]という章を倉田稔氏が書いており、他の章も植物、野鳥、地史学、文学などの観点からこの美しい自然にアプローチしている。（銀河書房 1800円、1989年12月発行）碓井 記

1991年2月

寄せ蛾記58号

■■■■■ オオイチモンジシマゲンゴロウの伊奈町における記録 ■■■■■

氷室 美芳

1990年7月13日、伊奈町の我家の誘蛾燈に オオイチモンジシマゲンゴロウ 1♂ が飛来した。その後、9月8日には、自宅の前庭に約1ヶ月前に設置した小さい池（プラスチック製、幅70cm、長さ160cm、深さ65cm、舟底型で最深部65cm）でカエルを摂食していた1♀を、たまたま我家を訪れた竹内崇夫氏が発見。現在、筆者の手許で飼育中である。未調査ではあるが、約100m南の用水路や、それに続く原市沼（上尾市原市）に相当数棲息しているものと思われる。

(ひむろ みよし 〒362 北足立郡伊奈町小室 227)

■■■■■ 埼玉県におけるキベリマメゲンゴロウの採集記録 ■■■■■

雑倉 正人

筆者は、従来埼玉県から記録のないキベリマメゲンゴロウ *Platambus fimbriatus* SHARP を、次の2地点で得ているので報告しておきたい。

1 ex. 嵐山町都幾川河川敷 2. I. 1991.

2exs. 花園町永田 荒川河川敷 3. I. 1991. 共に筆者採集・保管。

いずれも玉石のころがる、浅瀬のよどみで得たものである。

[参考文献]

斎藤良夫, 1978; 埼玉県の甲虫, 埼玉県動物誌, 221.

阿部光典・笛井厚子, 1986; 北本市石戸宿の甲虫類, 寄せ蛾記(48): 697-698.

阿部光典, 1990; 埼玉県産ゲンゴロウ類の記録, 寄せ蛾記(56): 1024-1025.

(ひなくら まさと 〒336 浦和市大間木 1388-3 東浦和シティハイツ 201)

【訂正】

寄せ蛾記55号 松田幸弘: 鳩山町におけるトンボ3種の記録 pp. 1008-1010

の中で、p. 1009のオオキトンボの項、12行目

(誤) いずれにしても本種1♂のみの採集記録… ⇒ (正) いずれにしても本種1♀のみの採集記録…

寄せ蛾記 58号 目次

朝比奈 正二郎：みどりしじみ回顧	1066
奈良 栄之：謎の直角飛行から	1069
樋田 光：「タカネヒカゲに会えました」の記	1074
野沢 雅美：埼玉県産半翅類雑記（13）	1077
中川 利勝：埼玉県産蝶類記録（1）	1078
中川 利勝：浦和市南浦和でコシロシタバを採集	1080
斎藤 洋一：大宮市大和田町のコシロシタバ	1080
小野寺 博昭：南房総から（3）	1081
碓井 徹：入間郡日高町にてハネビロトンボを採集	1085
小野寺 博昭：清澄山における1990年夏の蝶の記録	1086
柳田 恒一郎：皆野町でクワトゲエダシャクを採集	1087
碓井 徹：北本市石戸宿でカトリヤンマを採集	1087
磯野 治司：北本市石戸宿における注目すべきトンボ類	1088
中川 利勝：浦和市大谷口のツマグロキチョウ	1090
中川 利勝：川口市小谷場のムラサキシジミ訪花例	1091
（碓井徹）：本の紹介；『水よ語れ』	1091
氷室 美芳：材仔モジシマゲンゴロウの伊奈町における記録	1092
雛倉 正人：埼玉県におけるキベリマメゲンゴロウの採集記録	1092
訂正	1092
会報	1093